

7. 当科で経験した深頸部膿瘍の4症例（抄録）

菅田研一、西岡信二、江谷 勉、中島智子、菅田明美、角南祐子、赤木博文、

西崎和則（岡山大）

鶴迫裕一（神戸市立西市民病院）

永井陽介（鳥取市民病院）

深頸部膿瘍は上気道感染、扁桃炎、耳下腺炎、顎下腺炎や齲歯などの様々な原因から頭頸部の筋膜で区切られた間隙に炎症が波及することで腫瘍を形成する疾患である。従来、起炎菌は溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌が多いとされていたが、最近では嫌気性菌の関与が重要視されている。糖尿病や免疫不全などの基礎疾患を持つ患者や高齢者などで、しばしば重篤化がみられ、炎症が縦隔洞に進展した場合やガス産生を伴っている場合は予後不良であると報告されている。その診断と治療には緊急を要する場合も多く、耳鼻咽喉科領域における重要な感染性疾患であるといえる。当科では1997年から2000年6月現在までに、外科的治療を要した深頸部膿瘍を4症例経験した。このうち3症例ではガス産生像が画像診断上、認められた。これら4症例の臨床経過、および治療について検討し、若干の文献的考察を加えて報告する。